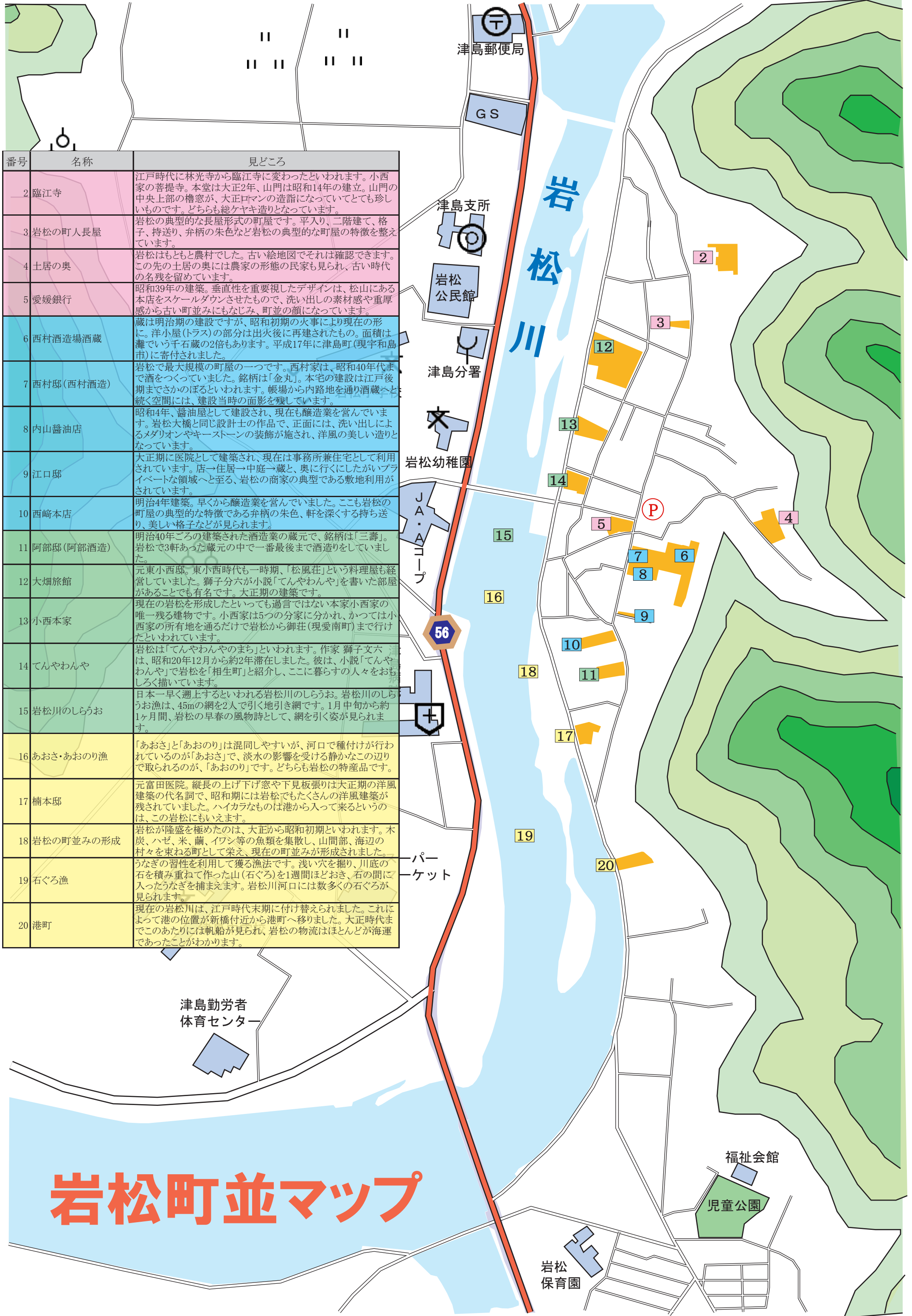


番号	名称	見どころ
2	臨江寺	江戸時代に林光寺から臨江寺に変わったといわれます。小西家の菩提寺。本堂は大正2年、山門は昭和14年の建立。山門の中央上部の櫓窓が、大正ロマンの造詣になっていてとても珍しいものです。どちらも総ケヤキ造りとなっています。
3	岩松の町人長屋	岩松の典型的な長屋形式の町屋です。平入り、二階建て、格子、持送り、弁柄の朱色など岩松の典型的な町屋の特徴を整えています。
4	土居の奥	岩松はもともと農村でした。古い絵地図でそれは確認できます。この先の土居の奥には農家の形態の民家も見られ、古い時代の名残を留めています。
5	愛媛銀行	昭和39年の建築。垂直性を重要視したデザインは、松山にある本店をスケールダウンさせたもので、洗い出しの素材感や重厚感から古い町並みにもなじみ、町並の顔になっています。
6	西村酒造場酒蔵	蔵は明治期の建設ですが、昭和初期の火事により現在の形に。洋小屋(トラス)の部分は出火後に再建されたもの。面積は灘でいう千石蔵の2倍もあります。平成17年に津島町(現宇和島市)に寄付されました。
7	西村邸(西村酒造)	岩松で最大規模の町屋の一つです。西村家は、昭和40年代まで酒をつかっていました。銘柄は「金丸」。本宅の建設は江戸後期までさかのぼるといわれます。帳場から内路地を通り酒蔵へと続く空間には、建設当時の面影を残しています。
8	内山醤油店	昭和4年、醤油屋として建設され、現在も醸造業を営んでいます。岩松大橋と同じ設計士の作品で、正面には、洗い出しによるメダリオンやキーストーンの装飾が施され、洋風の美しい造りとなっています。
9	江口邸	大正期に病院として建築され、現在は事務所兼住宅として利用されています。店→住居→中庭→蔵と、奥に行くにしたがいプライベートな領域へと至る、岩松の商家の典型である敷地利用がされています。
10	西崎本店	明治4年建築。早くから醸造業を営んでいました。これも岩松の町屋の典型的な特徴である弁柄の朱色、軒を深くする持ち送り、美しい格子などが見られます。
11	阿部邸(阿部酒造)	明治40年ごろの建築された酒造業の蔵元で、銘柄は「三壽」。岩松で3軒あった蔵元の中で一番最後まで酒造りをしていました。
12	大畑旅館	元東小西邸。東小西時代も一時期、「松風荘」という料理屋も経営していました。獅子分六が小説「てんやわんや」を書いた部屋があることでも有名です。大正期の建築です。
13	小西本家	現在の岩松を形成したといっても過言ではない本家小西家の唯一残る建物です。小西家は5つの分家に分かれ、かつては小西家の所有地を通るだけで岩松から御荘(現愛南町)まで行けたといわれています。
14	てんやわんや	岩松は「てんやわんやのまち」といわれます。作家 獅子文六は、昭和20年12月から約2年滞在しました。彼は、小説「てんやわんや」で岩松を「相生町」と紹介し、ここに暮らすの人々をおもしろく描いています。
15	岩松川のしらうお	日本一早く遡上するといわれる岩松川のしらうお。岩松川のしらうお漁は、45mの網を2人で引く地引き網です。1月中旬から約1ヶ月間、岩松の早春の風物詩として、網を引く姿が見られます。
16	あおさ・あおのり漁	「あおさ」と「あおのり」は混同しやすいが、河口で種付けが行われているのが「あおさ」で、淡水の影響を受ける静かなこの辺りで取られるのが、「あおのり」です。どちらも岩松の特産品です。
17	楠本邸	元富田医院。縦長の上げ下げ窓や下見板張りは大正期の洋風建築の代名詞で、昭和期には岩松でもたくさんの洋風建築が残されていました。ハイカラなものは港から入って来るというのは、この岩松にもいえます。
18	岩松の町並みの形成	岩松が隆盛を極めたのは、大正から昭和初期といわれます。木炭、ハゼ、米、繭、イワシ等の魚類を集散し、山間部、海辺の村々を束ねる町として栄え、現在の町並みが形成されました。
19	石ぐる漁	うなぎの習性を利用して獲る漁法です。浅い穴を掘り、川底の石を積み重ねて作った山(石ぐる)を1週間ほどおき、石の間に入ったうなぎを捕まえます。岩松川河口には数多くの石ぐるが見られます。
20	港町	現在の岩松川は、江戸時代末期に付け替えられました。これによって港の位置が新橋付近から港町へ移りました。大正時代までこのあたりには帆船が見られ、岩松の物流はほとんどが海運であったことがわかります。



岩松町並マップ